

・わたしは、台所で、おじいちゃんに手紙を書きました。…
また、「どのくらい」「どのように」に当たる言葉も、修飾語です。

・荷物は、かなり 重い。

どのくらい

・氷が、きらきらと かがやく。

どのように

…（『国語 三下 あおぞら』24-25）

しかし、「主語」「修飾語」どちらにも、質の異なるものがまとめられている。「主語」には「名詞+は」「名詞+が」が挙げられているが、これらをまとめるためには、形式面ではなく、何を表しているかという内容面を根拠にする必要がある。以下の（1）（2）では、「千太郎は」は「鉄板に向かっている」人、「係員が」は「椿山の名を呼んだ」人という、ともに動きの主体を表しており、上掲の「主語」に相当するが、（3）「弔辞は」は「署長と本部長が読んだ」対象を表しており、内容面から「主語」ではないことになる。

（1）千太郎は日があ一日鉄板に向かっている。（『あん』5）

（2）間合いよく係員が椿山の名を呼んだ。（『椿山課長の七日間』31）

（3）弔辞は署長と本部長が読んだが、ろくに話したこともない相手の死を褒めるのはさぞ難しかったことだろう。（『満願』8）

「名詞+は」「名詞+が」の違いが説明されている教科書でも、動きの対象を表す「名詞+は」等は取り上げられない。

「は」と「が」には、いろいろな使い分けがあります。

次の例文で考えてみましょう。

ア この中で、だれが六年生ですか。

わたしが、六年生です。

イ あなたは、六年生ですか。

わたしは、六年生です。

アのように、主語が分からず、「だれか（何か）」をはっきりさせるときは、「が」を使い、イのように、「だれか（何か）」（主語）がもう分かっているときには、「は」を使います。…（『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年下』14）

一方、「修飾語」について見ると、上掲の『三下 あおぞら』では、「おじいちゃんに」「手紙を」という「書きました」の相手と直接対象、「きのう」「台所で」という「（手紙を）書きました」の時点と地点、「かなり」という「重い」の程度、「きらきらと」という「かがやく」の様態といった、形式的にも内容的にも質の異なるものがまとめられている。

現在の「国語文法」は「橋本文法」を元にしてしているとされるが、例えば橋本（1959：73）では、「體言」の用法として、「助詞、が（の）を伴つて主語になる。をを伴つて客語になる。のを伴つて連體的修飾語に、に へ から より でを伴つて連用的修飾語に、…」を挙げ、また、同（同：144）は、「連用從屬文節」として「一、格助詞「が」を附けたもの、又「が」がなくとも之と同じ關係でつゞくもの「主語格」…二、格助詞「を」を附けたもの、又……「客語格」…三、其他の格助詞を附けたもの「補語格」…この他に體言及び準體法に係助詞あるものを認めてもよい——「提示格」等を示しており、これらに基づけば、「名詞+は」は「主語」ではなく「提示語」に、「名詞+を」は「連用修飾語」ではなく「客語」になるのではないか。「国語文法」に取り入れられるにあたって、単純化が行われたと考えられる。

本稿では、「国語文法」において、「主語」「修飾語」としてそれぞれまとめて扱われる成分を、形式面に注目して、どのようにとらえることができるかを検討する。なお、「修飾語」は「連用修飾語」に限る。

1. 「主語」について

1.1. 「主語」と「subject」

現代日本語の文の成分として「主語」を設定することは適切だろうか。三上（1972：88）「日本語では主格を表すことは格助詞「が」が受持ち、主題は係助詞が受持つというふうに分担がはっきり分れ、…「主語」という用語を適用すべき対象が、語法事実のうちに全然見つけられない。」のように「主語」を設定することを否定する説、奥田（1979：165）「…二語文における主語と述語とは、文のかかすことのできない一次的な要素であるが、そのうちの主語は、機能の観点からみれば、《のべられ》であって、それについてのべる物をさしだしながら、文のテーマとしてはたらく。」のように「主語」を積極的に認める説等、さまざまな考え方が提出されている。

一方、「主語」という概念の元になったと考えられる「subject」は、「thematic subject」（話し手によって何について語っているのかを同定するために採用された表現¹）、「logical subject」（動作主に言及する表現²）、「grammatical subject」（動詞の一致を決定する名詞類、格の文法的カテゴリーについて屈折変化していること、文における他の名詞類に関するその名詞句の位置³）という、異なる質の成分を表しうることになる（Lyons（1977：501-504））。現代日本語において「主語」を設定することが適切かどうか考えるためには、「名詞

¹ “… the expression that is employed by a speaker to identify what he is talking about ….” (Lyons (1977 : 501))

² “… the expression referring to the agent ….” (Lyons (1977 : 502))

³ “… the nominal which determines verbal concord; … its being inflected for the grammatical category of case. … the position of nominal relative to other nominals in the sentence ….” (Lyons (1977 : 504))

+は」 「名詞+が」 がそれぞれ文の成分としてどのような役割を果たしているのかを明らかにすることが必要であろう。

1.2. 「名詞+は」「名詞+が」の用法⁴

0 でみた (1) 「千太郎は…鉄板に向かっている」(2) 「…係員が椿山の名を呼んだ」のように、「名詞+は」「名詞+が」どちらにも動きの主体を表す用法がある。しかし、「名詞+は」は、「述語」とのさまざまな意味関係において用いられうる。以下の(4)「敷居は」は「またがなかった」の通行地点を、(5)「松兵衛」は「按配が良くない」人を、(6)「向島は」は「…鄙びた風情で…静かでのんびりしている」場所を、(7)「(去年の)夏は」は「泳がなかった」時点を、それぞれ「提示」している。「名詞+は」は、三上(1972)の位置づけのように「主題」を提示し、その文で何について述べられているのかという叙述を導く、いわば「提示成分」⁵とみなすことができる。

(4) 二週間ほど、天城さんの屋敷の敷居はまたがなかった。(『きつねのはなし』31)

(5) 松兵衛は、確かに按配が良くない。(『蜷塚』251)

(6) 向島は江戸市中でも鄙びた風情で、田畑や寺の地所が多いから、ぐっと静かでのんびりしている。(『蜷塚』239)

(7) 去年の夏は、一度も泳がなかった。(『春のオルガン』10)

これに対して、「名詞+が」は、次の(8)「支度ができていた」(9)「ビルが見える」(10)「何が怖かったんですか」(11)「…禁煙になったことが…恨めしい」のような考察が必要な場合を除けば、動詞等によって表される動き／状態の主体を表しており、「主体表示成分」⁶とすることができる。

(8) 帰宅するとすでに夕食の支度ができていた。(『塩狩峠』32)

(9) 右手の前方に白いビルが見える。(『椿山課長の七日間』21)

(10) 「何が怖かったんですか?」(『きつねのはなし』16)

(11) こんな日は交番が禁煙になったことが無性に恨めしい。(『満願』9)

1.3. 文の構成における「名詞+は」「名詞+が」

続いて、「名詞+は」「名詞+が」が文の構成の面からどのようにとらえることができるかを見る。増井(1997:218)は、「名詞+は」を「ハは、キル機能である。…切ったところで主題を示す。比較的、遠くの文章陳述にかかわる述語、述部と対応することが多い。いわゆ

⁴ 「名詞+は」「名詞+が」の用法、「名詞+は」の有無による文の構成の違いについては、拙稿(2022)での考察を元にした。

⁵ Lyons(1977)の「thematic subject」(注1参照)に相当するということができる。

⁶ 「が」を主体表示の手段ととらえれば、Lyons(1977)の「grammatical subject」(注3参照)に相当するということができる。

る題述関係を示す。…」、 「名詞+が」を「がは、マトメル機能である。「連節」の「核」の機能をガが果たす。ガを中心に従属節を作る機能だ。近くの数箇の文節を、ガが主格となりマトメル機能である。…」と位置づけている。

「名詞+は」は、次の(12)「私自身は」が「…一年生で」「…通ったわけでもなく」によって叙述されるとともに、文末の「…何の未練もなかった」によっても叙述されているように、文末の「述語」によって叙述される。

(12) 私自身はまだ一年生で、その一学期の途中で父が亡くなったのだからろくに通ったわけでもなく、前の学校に何の未練もなかった。(『ポプラの秋』20)

これに対して、次の(13)「千太郎が鉄板から顔を上げると」では、「千太郎」の動きが事実であるのか、いつのことであるのかは「鉄板から顔を上げると」自体によっては表されず、文末が「立っていた」であることによって、この動きが過去の実事であることが明らかになる。このように、「名詞+が」を含む「まとまり」は、それ自体で過去／現在／未来、事実／推量等を明示せずに文の一部として用いられうる。「が」が後続する表現による動き／状態の主体であるという意味関係のみを明示するという点で、「名詞+が」は、その名詞を主体とする動き／状態等を表す表現に「従属」しているということができる。

(13) 千太郎が鉄板から顔を上げると、白い帽子の高齢者がまた桜の木の下に立っていた。(『あん』19)

以上より、「名詞+は」は、叙述を導く「提示成分」としての役割を果たしており、「名詞+は」を含む文は、叙述を導く部分と叙述する部分から構成されるのに対し⁷、「名詞+が」は、「主体表示成分」として動き／状態を表す動詞・形容詞⁸等とまとまりを作り、「名詞+が」と動詞・形容詞等とのまとまりは、その全体が一つの叙述する部分であるということができる。なお、「述語」とは、「動き／状態表示成分」であり、同時に、叙述する部分（の中心）としての「叙述成分」であるということができる。

2. 「連用修飾語」について

2.1. 「連用修飾語」に対する批判

0で見たように、「国語文法」では、形式面でも内容面でも異なる質のものをまとめて「連用修飾語」とする。鈴木(1972:112)は、「連用修飾語という概念は、用言および用言に準じるもの(体言+「だ」「です」など)にかかる主語以外の成分としか規定のしようのないものであって、どのような関係で他の成分とむすびつくかという関係の内容的な面は無

⁷ 青木(1992:76)では「二分結合」と呼ばれる。ただし、二自立語間の従属的結合に限定した本稿の「結合」とは異なる用語である。なお、ひとまとまりであったものが分かれた上で連結したのか、それとも、独立していた二つのものが連結したのかについて、考察が必要なのではないだろうか。

⁸ いわゆる「形容動詞」を含む。鈴木(1972:428-429)「第二形容詞」参照。

視されているのである。…」と批判し、「述語のあらわす動きや状態の成立にくわる対象をあらわす文の部分」という「対象語」、「述語のあらわす動き、状態、性質の属性であるようす（質、やり方）量、程度をとりだしてあらわす文の部分」という「修飾語」、「主語と述語（あるいは、それに対象語や修飾語のくわったもの）のあらわすできごと、ことがらとなりたつ場所、とき、原因、目的をあらわす文の部分」という「状況語」を設定する（同（同：90/97/99-100））⁹。また、早津（2010：60）は、「学校文法では、ふつう文の成分として、主語・述語・連体修飾語・連用修飾語・独立語の5つをみとめる。このうち、主語と述語以外の成分については、どの部分にかかるかという関係の形式面にのみ注目して分類されている。」と鈴木（1972）を受け継ぎながら、「…“前の文とその文との、話者の立場から捉えたつながりを表す”成分を接続語とし、…“文の陳述的な側面を補足したり強調したりする”成分を陳述語とする。」（同（同：63））としてさらに二つの成分を立て、一方、「家につく、会場からでる、駅まで歩く、岸をはなれる」の各波線部分のような、鈴木（1972：106）では「対象的な性格をもっている」が「場所をあらわす」ために「状況語」とされるような成分も、「述語のあらわす動きや状態に主語とともに参加するものを提示して、主語と述語からなる骨組構造を補う”成分”である「補語」（引用注：鈴木（1972）の「対象語」に相当）として、「連用修飾語」を「補語」「修飾語」「状況語」「陳述語」「接続語」に分割する（同（同：65-67））。

2.2. 補足成分と指定成分¹⁰

鈴木（1972）、早津（2010）の諸成分は、物とそれを対象とする動き、時点・場所とそこにおける出来事といった、成分間の意味関係、あるいは、文全体の意味を基準としているといえる。一方、その成分自体に注目してみると、「陳述語」は、話し手／書き手が表されることがらを事実として、あるいは、推量としてとらえている等の情報を「述語」に加え、また、「修飾語」は、「述語のあらわす動き、状態、性質の属性であるようす（質、やり方）量、程度をとりだしてあらわす文の部分」（鈴木（1972：97）前掲）「述語の表す動きや状態について、その様子・程度・量などを詳しく説明して述語をかざる”成分”」（早津（2010：64））として、動詞・形容詞に動き／状態の属性についての情報を加えており、どちらも他

⁹ この分類は、ソ連邦科学アカデミー（1960）の дополнение 「補語」、 обстоятельство 「状況語」： обстоятельства, обозначающие качественную характеристику или способ совершения действия 「質的特徴づけあるいは動作成立方法を表す諸状況語」／ обстоятельства, обозначающие место, время, меру, причину, цель, условие 「場所、時間、規模、原因、目的、条件を表す諸状況語」というとらえ方に影響を受けていると考えられる。

¹⁰ 名詞と動詞との従属的な結合関係については、拙稿（2016）、（2017）での考察を元にした。

¹¹ 「格助辞」という名称は村木（1991：27-28）、「助辞は非自立的な形態素で、広義の接辞にふくまれるが、前後の形式から相対的に独立していて、その単語性もつよい。ただし、語彙的な意味をもたず、文法的な意味だけをになう。」に従う。

の成分に情報を加えているということが出来る。これらに対して、「名詞+格助辞¹¹」は、その文中での意味が結合する動詞によって決定されるもの、名詞の語義の特徴によって決定されるもの、格助辞自体が明確な意味をもつもの等に分かれており、他の成分に情報を加える成分とともに、他の成分によってその文中の意味が決定される成分がある。

第一に、「名詞+を」は、動詞との結合においてさまざまな意味で用いられる¹²。

(14) ボストンバッグに下着の替えと洗面用具、それから薬のいっぱい詰まった紙袋を投げ込むと、勢いよくジッパーを閉めた。(『ポプラの秋』 8)

(15) 信夫は今、鏡にむかってつくづく自分の顔をみつめていた。(『塩狩峠』 5)

(16) 彼はヴェラと連絡を取りたいと思い、あらゆる手段を試みたが、消息を伝えることはできなかった。(『雲の宴 (上)』 240)

(17) 菊は、迫害されて十字架につけられた、イエス・キリストを思った。(『塩狩峠』 48)

(18) 夜遅く、私たちはポプラ荘を出た。(『ポプラの秋』 99)

(19) 今日一日だけで幾人がこの道を通るだろう。(『満願』 9)

(14) 「…紙袋を」は「投げ込む」という動きの対象を、「ジッパーを」は「閉める」という動きの対象を、(15) 「顔を」は「みつめる」という知覚の対象を、(16) 「消息を」は「伝える」という言語活動の対象を、(17) 「イエス・キリストを」は「思う」という思考活動の対象を、それぞれ表している。また、(18) 「ポプラ荘を」は「出る」という移動の出発地点を、(19) 「道を」は「通る」という移動の通行地点を、それぞれ表している。このように、動詞との結合において用いられている「名詞+を」は、その動詞の語義の特徴¹³によって文中の意味が決定されるということが出来る。

第二に、「名詞+に」もまた、動詞との結合においてさまざまな意味で用いられる。

(20) たこあげがおわってから、教会にいきました。わたしは、ひろゆきおじさんの家で、おばあちゃんとこうえんにいったときに、きれいなブローチをひろいました。そのブローチを、イエスさまにあげました。(『ポプラの秋』 124)

(21) 「なにを言ってるの? あんが命でしょ、店長さん」

「はあ……まあ、だから吉井さんに来てもらおうと」(『あん』 27)

(22) 門の脇に制服を着た係員が立っていた。

「あの方にお訊ねしてみましようよ」(『椿山課長の七日間』 23)

(23) 店は、線路沿いの道から一本路地を抜けた桜通りという名の商店街にあった。(『あん』 5)

¹² 「名詞+を」と動詞との結合の詳細については奥田(1968-72)を参照。

¹³ 何らかの文法現象において明らかになる語義の特徴については、奥田(1968-72:30)「語彙的な意味の性格」、宮島(1972:671)「語い的意味の形式的側面／範ちゅう的な側面」を参照。

(24) 後は家に帰って寝るだけだ。その前に一服つけようと喫煙室に行くと、梶井が先客で入っていた。(『満願』12)

(20) 「イエスさまに」は比喩的に授受の相手を、(21) 「吉井さんに」は依頼の相手であり「来る」人を、(22) 「あの方に」は言語活動の相手を(23) 「商店街に」は「店」の存在地点を、(24) 「家に」「喫煙室に」は到着地点を、それぞれ表している。動詞との結合において用いられている「名詞+に」は、名詞・動詞双方の語義の特徴によって文中の意味が決定されるということができる。

「名詞+を」「名詞+に」の文中の意味には、動詞の語義の特徴が決定要因として参加し、動きの何らかの対象を表すという共通点があり、この意味で動詞に支配される成分、「被支配-対象表示成分」ということができる。

第三に、「名詞+で」は、名詞の語義の特徴によって文中の意味が決定されるということができる。

(25) いつものようにぼくたち三人は、近くのハンバーガー店で買ったヨーグルトドリンクをストローで吸いながら、暗いバス停のベンチに座っていた。(『夏の庭』11)

(26) 私は、優しい手つきで皿の破片を拾い集めている彼女の姿を思い描いた。(『きつねのはなし』25)

(27) 私は、あなたは交通事故で亡くなったのだ、と言い続けるつもりです。(『ポプラの秋』184)

(25) 「ハンバーガー店で」は「買った」場所を、「ストローで」は「吸う」道具を、(26) 「…手つきで」は「拾い集める」様態を、(27) 「交通事故で」は「亡くなった」原因を、それぞれ表している。いずれも名詞の語義の特徴によって文中の意味が決定され、動詞の表す動きに情報を加えている。

第四に、「名詞+から/まで/へ」は格助辞自体が明確な意味をもっているということができる。

(28) 松兵衛が丁稚奉公をしているところに、旦那さまから目をかけられていた若い手代がいた。小作りだが美男で、お嬢さんから慕われていた。それがいけなかったのか、まもなくお暇を出されてお店から姿を消した。(『蜷塚』248)

(29) 川藤が殉職した日は、朝からおかしな事が続いていた。(『満願』27)

(30) 丘の下の岐れ道まで、息子と手をつないで歩いた。(『椿山課長の七日間』10)

(31) 自分はつきさきまで料理屋にいた。(『椿山課長の七日間』24)

(32) 「本当は私が行かなければならなかったのです。けれども、私はあの人のところへ行くのが好きではないのです」(『きつねのはなし』17)

(33) 私はそのまま、その黒光りする小箱を天城さんの方へ押しやった。(『きつねのはなし』13)

(28)「旦那さまから」「お嬢さんから」は動く人を、「お店から」は移動の始点を、(29)「朝から」は始まる時点を表しているが、どの場合も名詞は何らかの始点を表しており、「から」自体が始点を表す助辞である。(30)「岐れ道まで」は移動の終点を、(31)「さっきまで」は終わる時点を表しており、「まで」自体が終点を表す助辞である¹⁴。(32)「あの人のところへ」(33)「天城さんの方へ」は移動の方向を表しており、「へ」自体が方向を表す助辞である。

「名詞+で」と「名詞+から/まで/へ」は、その文中の意味を決定する要因は異なっているが、「名詞+格助辞」自体が一定の意味を持ち、他の成分に付加されて、動きの地点/道具/原因/様態、あるいは、何らかの始点/終点/方向等を指定する成分であるということが出来る。

なお、以下のような例では、「は」によって「提示成分」であることが示されるが、同時に、格助辞によって述語「叙述成分」への「補足成分」(「名詞+には」)、「付加成分」(「名詞+では/からは/までは/へは」)でもあることが示されている¹⁵。

(34) 財布にはは、もはや金がないのだ。(『デラックスな拳銃』13)

(35) いくら長年仕えたと言っても、奉公人のことだから、小河屋では仰々しい葬儀など出さない。(『蜷塚』253-254)

(36) その場所からは、空港の滑走路が、真向いに見えた。(『雲の宴(上)』199)

(37) 「ああ、ウィーンから国境までは五十キロだ。ウィーンはずっと東寄りに位置しているんだ」(『雲の宴(上)』303)

(38) 天城さんの屋敷へは何度も通った。(『きつねのはなし』18)

2.3. 述語の形と呼応する成分

前掲のように、早津(2010)は「文の陳述的な側面を補足したり強調したりする」成分として「陳述語」を挙げているが、(39)「もしかしたら…かもしれない」(40)「おそらく…だろう」(41)「たぶん…だろう」(42)「きっと…にちがいない」(以上、推量)(43)「ぜひ…いただきたい」(願望)では、「陳述語」が推量/願望等を明示する「叙述成分」としての述語の形と呼応している。

(39) 母は眠り続けた。どのくらい眠っていたのだろうか。一週間、いやもっと長かったような気もするけれど、もしかしたら三、四日のことだったのかも知れない。(『ポプラの秋』10)

(40) 「どうしてそうしないんだ？」

「おそらく君と同じ理由だろう。つまり名誉の問題さ」(『雲の宴(上)』302-303)

¹⁴ このような「名詞+まで」を「格」とすることについては鈴木(1972:216-217)参照。

¹⁵ 青木(1992:183-196)では、「ニハ・デハ」は「状況題目提示」と呼ばれる。

(41) 広い車道を時おり走ってくる車の速度は遅い。たぶんスピード違反取り締まりの名所なのだろう。(『椿山課長の七日間』14)

(42) やがてポプラ荘から三軒目の、角の家の犬が激しく吠えだした。この犬は無駄吠えばかりする駄犬で、きっと誰かがそばを通ったにちがいない。(『ポプラの秋』40)

(43) 「いや、ぜひ郊外に出ていただきたいのです」(『雲の宴(上)』133)

推量／願望等を示す述語の形と呼応する「陳述語」の他に、鈴木(1972)、早津(2010)では「状況語」の一種とされる時点を示す成分も、述語の時制の形と呼応する。

(44) 「実はね、三週間ほど前に黒田くんから連絡をもらったのよ」(『この世界で君に逢いたい』10)

(45) 「じゃ、決まりだ。明日、大村のところへ行ってくる。敦子もきてくれないか。君のような意見もあったってこと、大村に言ってやったほうがいいから」(『雲の宴(上)』168)

(44)「三週間ほど前に」と「もらった」という過去時制が、(45)「明日」と「行ってくる」という非過去時制がそれぞれ呼応している。時点を表す成分も、「述語の形と呼応する成分」である。これらには、語義が「時点」という特徴を持つ語が用いられている。

3. まとめ

以上の考察から、「連体修飾語」以外の文の成分として次のものを設定することができる(「接続語」を除く)。

I. 「名詞+は」：提示成分(叙述を導く部分)(1.3)

「名詞+には」：提示—補足成分／「名詞+では/からは/までは/へは」：提示—指定成分(2.2)

II. 「述語」としての「動詞／形容詞」

：動き／状態表示成分＝叙述成分(叙述する部分(の中心))(1.3)

III. 他の成分に従属する成分¹⁶

(i) 「名詞+が」：主体表示成分(1.3)

(ii) 「名詞+を」「名詞+に」：被支配—補足成分(2.2)

(iii) 「名詞+で」「名詞+から/まで/へ」

：動き地点／道具／原因／様態／始点／終点／方向指定成分(付加成分)(2.2)

(iv) 「副詞」：属性成分(鈴木(1972)、早津(2010)の「修飾語」)

IV. 述語の形と呼応する成分(推測／願望等、過去／現在／未来を示す)(2.3)

¹⁶ 「名詞+格助辞」(特定の格形式の名詞)と動詞との従属的な結合関係については、拙稿(2018)での考察を元にした。

上記の案に基づいて、以下の文例の分析を試みる。

(46) 桜の木の下でコオロギが鳴いていた。(『あん』101)

「(桜の) 木の下で」動き地点指定成分+「コオロギが」主体表示成分+「鳴いていた」動き表示成分=叙述成分による、全体がの叙述する部分である文

(47) 信夫の父は日本銀行につとめていた。(『塩狩峠』8)

「(信夫) の父は」提示成分+「日本銀行に」補足成分+「つとめていた」動き表示成分=叙述成分による、叙述を導く部分「信夫の父は」と叙述する部分「日本銀行につとめていた」から構成される文

(48) われわれはこの新発見の星から、きっと、なにかを地球にもたらすことができるだろう。(『待機』149)

「われわれは」提示成分+「(この新発見の) 星から」始点指定成分+「きっと」述語の形と呼応する成分+「なにかを」補足成分+「地球に」補足成分+「もたらすことができるだろう」動き表示成分=叙述成分による、叙述を導く部分「われわれは」と叙述する部分「この新発見の星から、きっと、なにかを地球にもたらすことができるだろう」から構成される文

(49) アフリカ人の声には皮肉な調子があった。(『雲の宴(上)』27)

「(アフリカ人の) 声には」提示-補足成分+「(皮肉な) 調子が」主体表示成分+「あった」存在表示成分=叙述成分による、叙述を導く部分「アフリカ人の声には」と叙述する部分「皮肉な調子があった」から構成される文

(50) 物置の裏では猫が子供を産んだ。(『ポプラの秋』143)

「物置の裏では」提示-動き地点指定成分+「猫が」主体表示成分+「子供を」補足成分+「産んだ」動き表示成分=叙述成分による、叙述を導く部分「物置の裏では」と叙述する部分「猫が子供を産んだ」から構成される文

(51) その場所からは、空港の滑走路が、真向いに見えた。(『雲の宴(上)』199)

「(その) 場所からは」提示-始点指定成分+「(空港の) 滑走路が」主体表示成分+「真向いに」補足成分+「見えた」状態表示成分=叙述成分による、叙述を導く部分「その場所からは」と叙述する部分「空港の滑走路が、真向いに見えた」から構成される文

以上、ある程度明確な判断が可能な、極めて限られた範囲ではあるが、「主語」「連体修飾

語」とされる現代日本語の文の成分について考察を試みた。今後、明確とはいえない成分の分析、また、語義のどのような特徴を持つ語が各成分に用いられるかという記述を含め、より精密化を試みたい。さらに、これらの見方を国語文法教育にどのように取り入れるべきか考えてゆきたい。

【参考文献】

- 青木伶子 (1992) 『現代語助詞「は」の構文論的研究』 笠間書院
- 岡田幸彦 (2016) 「現代日本語名詞の「格」記述のための序論——格形式と意味決定要因——」(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 1 『小出慶一教授退職記念論文集 ことばの本質を求めて』 44-56)
- (2017) 「現代日本語の連用成分についての一考察——名詞の文法的意味・動詞の語義から——」(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2 『仁科弘之教授退職記念論文集 言語についてのX章 言語を考える、言語を教える、言語で考える』 142-156)
- (2018) 「現代日本語における語結合——日本語「連語論」再検討——」(『埼玉大学紀要(教養学部)』 53-2 : 73-87)
- (2022) 「現代日本語の文の構成についての一試案——「名詞+は」「名詞+が」と他の構成要素との関係の面から——」(拓殖大学日本語教育研究所『日本語教育研究』 7 : 77-102)
- 奥田靖雄 (1968-72) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』 21-149むぎ書房)
- (1979) 「意味と機能」(奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』 159-169むぎ書房)
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 橋本進吉 (1959) 『國文法體系論』 岩波書店
- 早津恵美子 (2010) 「連用修飾語の解体」(『国文学 解釈と鑑賞』 第75巻 7号60-68至文堂)
- 増井金典 (1997) 『「が」と「は」についての研究』 滋賀女子短期大学
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』 くろしお出版
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 (ひつじ書房)
- Lyons, J. (1977) *Semantics 2*. Cambridge University Press.
- Академия Наук СССР (1960) *Грамматика Русского Языка. Том II. Синтаксис. Часть Первая*. Москва.

(ソ連邦科学アカデミー (1960) 『ロシア語文法第2巻 統語論 第1分冊』モスクワ)

【小学校教科書】

光村図書『こくご 二下 赤とんぼ』2011年

同『国語 三下 あおぞら』2011年

学校図書『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年下』2011年

【用例】

浅田次郎『椿山課長の七日間』集英社文庫／辻邦生『雲の宴 (上)』朝日文庫／ドリアン
助川『あん』ポプラ文庫／藤岡陽子『この世界で君に逢いたい』光文社文庫／星新一『デ
ラックスな拳銃』『待機』(『ようこそ地球さん』新潮文庫)／三浦綾子『塩狩峠』新潮文
庫／宮部みゆき『蜷塚』(細谷正充編『もののけ〈怪異〉時代小説傑作選』PHP文芸文庫)
／森見登美彦『きつねのはなし』新潮文庫／湯本香樹実『春のオルガン』『夏の庭』『ポプ
ラの秋』新潮文庫／米澤穂信『満願』新潮文庫